



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研修報告
Citation	北海道大学農学部附属農場技術業務報告, 4, 96-105
Issue Date	2000-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14522
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_96-105.pdf



平成 1 1 年度農学部附属農場技官研修日程表

於 農学部附属農場講義室ほか

月 日	9:00		10:00		11:00		12:00		13:00		14:00		15:00		16:00		17:00	
		9:30		10:30		11:30				13:30		14:30		15:30		16:30		
第一日目 3月7日(火)	開農 場 講長 挨 式抄	「生物系セン ター構想に ついて」 農場長 島本義也		「現在の食を取り 巻く状況-味・栄 養価・安全性・機 能性-」 道立中央農業試験 場長 相馬 暁		昼 休 み		施設等見学 産業廃棄物の中間処理施設群 札幌市リサイクル団地 札幌市東区中沼町										
第二日目 3月8日(水)	「クローン牛生産 技術に関する研 究の現状」 道立新得畜産試 験場生物工学科 長 南橋 昭		「60年の人生をふ り返りこれから の人生を考える」 農学部 附属農場 技術職員 仁和 敏夫		昼 休 み		技術実習 植物組織培養の実際 -セントポーリアの葉片培養と葉押し による繁殖効率の比較-											
第三日目 3月9日(木)	「遺伝子組み換え 作物の安全性」 北海道大学 農学研究科 教授 飯塚敏彦		米の食味試験 「道産米の安全 と食味試験」 農学部 附属農場 作物グループ		昼 休 み		「避難及び消火 訓練」 農場安全委員会		「草地生態 系を考慮 した酪農 生産」 農学部 附属農場 助手 中辻浩喜		「専門職員 研修につ いて」 農学部 附属農場 技術職員 河合孝雄		閉 講 式					

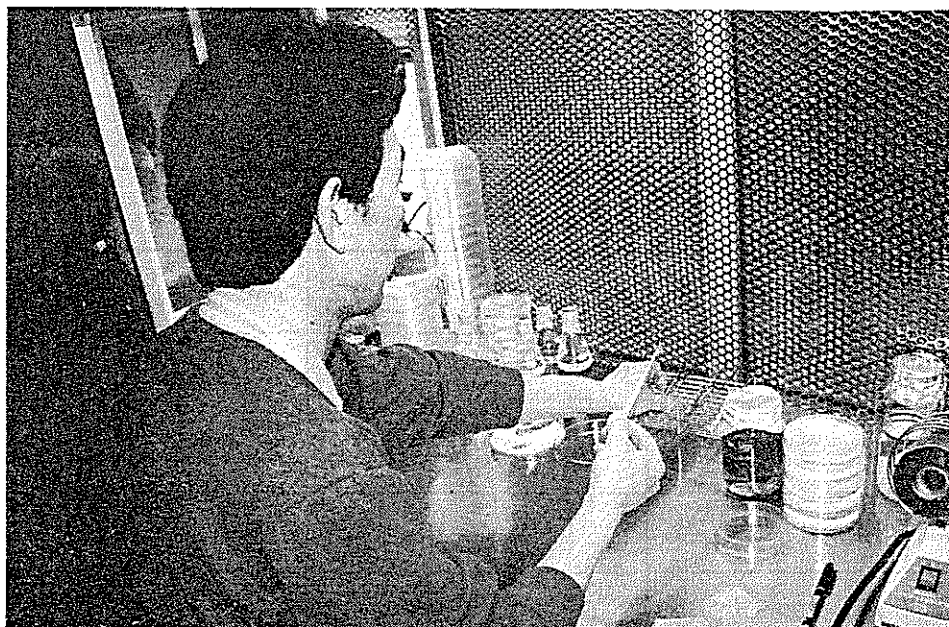
(都合により日程の一部を変更することがある。)

平成11年度北海道大学農学部附属農場技官研修（専門研修）

受 講 者 名 簿

番号	所 属	氏 名	番号	所 属	氏 名
1	技術部作物グループ	若澤 幸夫	16	技術部畜産グループ	高橋 太郎
2	〃	茂木 紀昭	17	〃	八巻 憲和
3	〃	角田 貴敬	18	〃	加藤 秀雄
4	〃	市川 伸次	19	〃	日置 昭二
5	〃	橋本 哲也	20	技術部機械グループ	河合 孝雄
6	技術部園芸グループ	齋藤 寛	21	〃	仁和 敏夫
7	〃	田村 春人	22	〃	佐藤 浩幸
8	〃	中野 英樹	23	農 学 部	浦山 勝
9	〃	山田 恭裕	24	農学部附属牧場	中城 敏明
10	〃	本田 隆俊	25	〃	埴 友之
11	〃	堀 廣孝	26	〃	富岡 輝男
12	〃	生田 稔	27	帯広畜産大学畜産学部附属農場	永田 恵美
13	技術部畜産グループ	原田 進	28	〃	加藤 祐介
14	〃	大嶋 栄喜			
15	〃	新海 秀史			

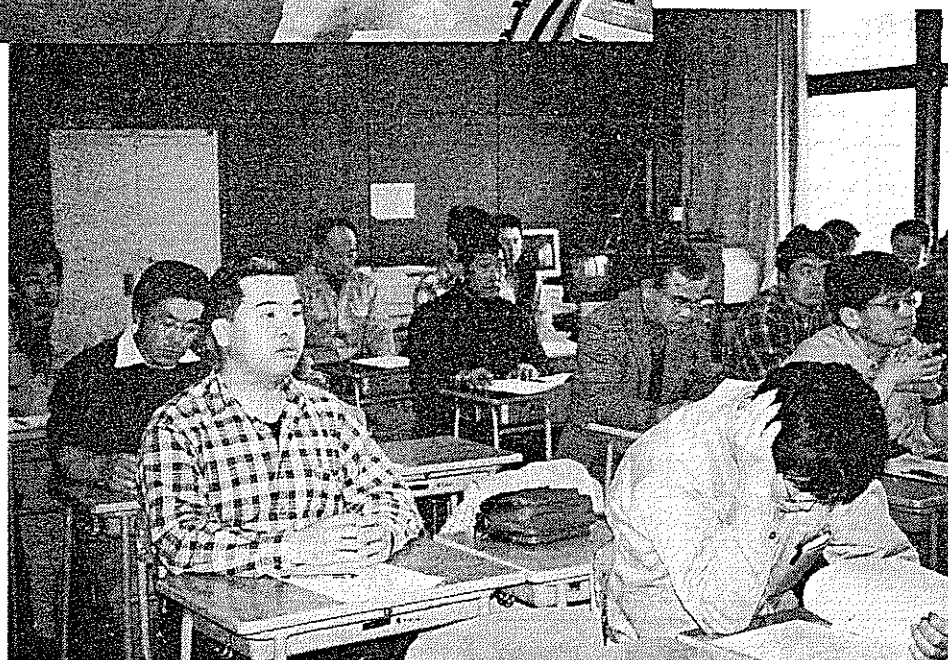
農場技官研修の様子



「植物組織培養の実際」
セントポーリアの葉片
培養実習



熱心に聞く受講者



北海道大学農学部技術部職員研修（第8回）受講者名簿（農場関係者）

期 間 平成11年10月25日（月）～10月27日（水）

場 所 北海道大学農学部 岩田醸造株式会社千歳工場

キッコーマン株式会社千歳工場 キリンビール株式会社千歳工場

中野 英樹	（園芸グループ）	山田 恭裕	（園芸グループ）	堀 廣孝	（園芸グループ）
生田 稔	（園芸グループ）	原田 進	（畜産グループ）	大嶋 栄喜	（畜産グループ）
新海 秀史	（畜産グループ）	八巻 憲和	（畜産グループ）	加藤 秀雄	（畜産グループ）
日置 昭二	（畜産グループ）				

国際昆虫会議への参加と蚕蜂業改良場を訪ねて (1997.11)

斎藤 寛

はじめに、

1997年8月頃、中田教授から、11月に台湾の台中で開催を予定している第3回アジア太平洋昆虫会議の中で行われる野蚕シンポジウムに参加しないかと誘いがあり一緒に同行することになった。

先生の台湾で旧来からの知り合いである蚕蜂業改良場（以下改良場に略）の林 洋三氏に連絡したところ、すぐにFax が場長名で来台を歓迎するという招請状が到着した。また、台湾には、楊 木霖氏という先生の知り合いもいて、太湖高級職業学校の主任をしていたが、定年前に辞職し、その後自分で蚕種製造をやっている。依頼を受けて卵や餌になるナラ類のドングリなどを何度か送ったことがある。

楊氏は、70才になるというのに、いつまでも青年の気概を持ち、宴席ではいつも乾杯の声をかけて元気なものである。教師の経歴も長いだけに教え子も多く、この地方の農協関係の大立物という存在である。

日程は、学会の開催に合わせて、11月16日羽田発23日着と決まった。往復とも日曜日で迎えや、見送りに便利と考えたからで、事実楊氏と彼の後任者である温 榮発氏が自分の車で苗栗から台北空港までわざわざ迎えに来てくれた。

日程と概要

月 日	概 要
11/16 (日)	札幌—羽田—台北—苗栗 (泊)
11/17 (月)	苗栗—台中—学会受付—台中 (泊)
11/18 (火)	台中—苗栗 (蚕蜂業改良場、楊氏宅、養蚕農家訪問) —台中 (泊)
11/19 (水)	学会エクスカージョン (日月潭ほか) —台中 (泊)
11/20 (木)	台中—高雄—台南 (科学工芸博物館) 台南 (泊)
11/21 (金)	台南—台中 (泊)
11/22 (土)	野蚕シンポジウム—終了後台北 (泊)
11/23 (日)	台北—羽田—札幌

11/16 (日)

約束の9時に日航カウンターで、中田先生とおちあい搭乗券をもらい、荷物を預ける。まだ時間があるので2Fのレストランで飛行機の発着を見ながら出発の乾杯をする。10時定刻発、羽田にやや遅れて到着、新空港からバスで旧空港へ移動して国際線のロビーに入り簡単な昼食を済ませる。数年前に国内線の発着が新羽田に移ってから、中華航空の発着だけとなり、このあたりもずいぶん様子が変わっている。

国際線の搭乗券を貰い (28Fa) 荷物を預けて出国の手続きをとる。中華航空 (C1017便) は14時05分発のところ、定刻より10分遅れて出発した。機種はジャンボ、ほとんど満員で、500人近い乗客の大半が日本人である。1時間後食事が出る。食後沖縄あたりで少し揺れる。ここで時差の修正1時間針を戻す。台湾時間16時40分定刻に到着。入国審査や荷物の受け取りに時間がかかった。これは乗客数が多いのでやむ得な

研修報告

い。

17時30分外へ出ると楊 木森氏と温 榮発氏の二人が待っていた。T/c 25円で4.860NT\$ (台湾ドル、元) となった。つまり1元約4円ということになる。17時45分、温氏の車で目的地である苗栗県公館郷に向かう。小雨の降る高速道路を南下して、1時間15分で公館郷のインターに着き、さらに一般道路を4キロ程走り、改良場に到着、ゲストハウスでは、林氏が我々の到着を待っていて、挨拶が終わると5人揃って改良場の小さな食堂に行く。林氏は、時々この食堂を利用するらしく、持ち込みの、改良場製ハチミツ焼酎で乾杯する。これは相当強いので、用心しながら杯を傾ける。次々と料理が運ばれ独特の香草の匂いが気になる。満腹してゲストハウスに戻り、林氏達と歓談。今日は太湖在住の楊氏もここに泊るというので、明日以降の予定など話し合う。林氏がカラオケを何曲か歌い、日本語の歌のサービスもする。ここのゲストハウスはカラオケも用意してあるのだ。

11月17日 (月)

朝6時頃起床して、ゲストハウスの周りを歩いてみる。ゲストハウス裏側に蚕糸文化会館と書いた看板がかかっている。昨晚林氏の言っていた機構改革のことがこれかと思われる。つまり台湾でも人件費の高騰で農業、特に養蚕が難しくなり、来年の1月から「農業推廣センター」に衣替えになるという話が急に現実のものと感じられる。林氏はこのセンター長と博物館長を兼任するということである。

台湾ではカイコが絹生産の手段のためでなく、ほとんど別の用途、つまり医薬原料として飼育されているということである。輸入できる農産物は日本と同様に開発途上国に任せようという考えが支配的である。

台湾ではカイコや米ばかりでなく、衣食住の素材産業が難しくなり、加工業や流通業、ひいては情報産業が大手を振ってやっていくことになるという時の流れである。

朝食後、温氏が出勤のため車で現れ、楊氏を乗せて去る。太湖の高校はここから車で30分位の所であり、太湖には戦前日本の蚕糸試験場の飼育所があり、遺伝の研究がされていたところと聞いている。

太湖は標高のある山中に位置し、台湾とは思われない冷涼で、カイコの飼育に好適な気象条件に恵まれたため、近くのこの学校に蚕糸科が設立され楊氏、温氏の二人は長く教員を勤められたそうです。

8時頃、改良場の車で台中の学会会場に向かう。運転手はリウさん。彼にはこれから何度も送り迎えをしてもらうことになる。渋滞で大回りして9時30分頃会場の自然科学博物館に着く。9時から開会式なので、セレモニーはすでに進行していた。数名の挨拶のあと、ビデオで台湾の動植物の紹介があった。

ここで昼近くになったので、本日の宿泊ホテルに行ってチェックインする。ホテルは「敬華飯店」で、中山公園の前にあり、一泊朝食付きで1400元日本円に換算して約6.000円となった。

食事後、会場に戻り講演を聞く、のほともかくとして博物館の中を見て歩くが、本日は休館日、誰もいないところを自由に歩き回る。次いで会場での林氏のパネル貼りを手伝って15時の休憩になる。休憩所には飲み物だけでなく、果物や軽食が沢山並び、接待の良さに感心する。中田先生の話では、あちこちの国際学会に出席しているが無料でこれまでサービスするのは、まず類を見ないそうである。

17時30分頃、歓迎パーティー会場に行く前に、近くの「そごうデパート」を見つけて先生と一緒に覗いてみる。陳列物は、ほとんど日本と変わらない。18時頃会場に行くと、すでに多くの参加者が会場を埋め、丁度料理の並んでいる近くに日本から参加した野蚕学会の人達がいたのでそこに入れてもらう。そのメンバーのうち蚕糸・昆虫農業技術研究所OBの栗林先生、北里大学の奥井先生とは明日以降同行することとなった。主催者の台北大学、朱先生の挨拶でウェルカムパーティーが開会、会場が狭く2つに分かれて混雑

するが途中で林氏が苗栗に帰ると言うので、これを機会に会場を抜けホテルに帰る。

11月18日（火） 台中一苗栗（蚕蜂業改良場、楊氏宅、養蚕農家訪問）

早朝目覚めて、6時のニュースを見るが、どうもTVの調子が良くない。家に電話してみると、拓銀の倒産を知らされる。7時15分頃中田先生と朝食に行く。朝はお粥に限る。8時頃、改良場の職員が迎えに来る。野蚕学会のメンバー6人で苗栗の改良場に向かう。9時過ぎ到着。ここで林氏編集の天蚕のビデオを見ているうちに場長が来場して挨拶される。この場長といい、林 洋三氏といい、名前だけ見ていると日本人と変わらない。

10時頃太湖の楊 木森氏宅に到着する。玄関に我々を歓迎する看板がおいてあり、さきに記した選挙みたいで自分の名前をみるのは、どうも居心地が良くない。室内で天蚕のサンプルや繊維、織物の試作品など、色々説明を受ける。毎年のように北大から天蚕卵を送っているが、これだけ懸命に飼育や利用開発をやっているのには頭が下がる。交通の激しい道路を挟んで、家蚕飼育用の蚕室やエサとなるナラの畑がある。北大から送ったドングリから育てたもので、ミズナラやコナラが見事に生長しているが、昨年9月の台風の被害を受けてナラの木の折れた跡が残っている。台風は家屋や畑に激甚な被害を与えたようだ。

次いで近くにある旧太湖飼育所に向かう。ここは改良場の原蚕飼育や系統維持を行なっているところで、皆で昔の名残のある飼育施設などを見せてもらった。次いで車は獅潭郷に向かい、養蚕農家を訪ねるといふ。その前に農会（日本でいえば農協）に立ち寄り、こちらの農業生産について説明を受ける。このあたりは、かなりの急斜面の山間地に、へばりつくように農家が点在する。この地は筍の産地として有名で、お土産に6割ほどのブリカンを勧められたが、持って帰れるはずがないと断念した。ここから養蚕農家に向かう途中で、観光農園の食堂に入った。同行の農会の人達に、大変ご馳走になり、案内の楊氏、林氏共々すっかりいい機嫌になる。農会の人達は、楊氏の教え子であり、従ってボスの楊氏のお客とあれば一生懸命接待してくれる。食後、徐 泉明さんの農場を訪ねる。ここは、本地区唯一の養蚕専業農家で、カイコを飼うだけでなく、平面上族から出来た真綿を使って、布団の加工までやり、一方桑からお茶を作ったり、養蚕に関する家族労働による多角経営で有名である。飼育室では平面上族中、また真綿の精練の実演も見せてくれた。台湾では、この真綿布団を結婚祝いとして用いられており高価ではあるが、好評で販路は開けているといふ。農会からは筍のかわりに、お茶とビン入りのメンマ（料理の加工原料）を貰い、改良場に戻る。とにかく、どこに行っても大歓迎で、これがお客をもてなすこの国のやり方である。改良場に戻って、展示博物館を見学する。カイコやミツバチの生活史から、飼育法、生産物の利用に至るまで素晴らしい展示が続く。この改良場でやっている研究の内容を素人が見ただけで分かるように展示してある。本日は実に多くの土産を貰ったが、その中の圧巻は何と言ってもシルクの編み傘である。これは、竹で編んだ帽子の上面にカイコに吐糸させたもので、絵も描いてある。カイコに吐糸させた製品としては、私も団扇作りを試みたことがある。均一に吐糸させるため徹夜して頑張ったことがあるからこの苦勞は良く分かる。実用的な価値はともかく、装飾品として最高だから無理をしながら持ち帰り家の自室の壁に飾って当時を思い出してる。

11月19日（水） 学会エクスカージョン（日月潭ほか）

6時45分食事に行く。昨日と同じお粥食、おかずは5品、ゆでたピーナツ、甘い豚肉のソボロ、半分に分った塩卵などが独特である。昼と夜は中華料理でかなり油っこいから朝くらいは口直しにお粥でないとお腹の調子が狂ってしまう。

研修報告

7時30分学会差し回しのバスで会場に行く。本日のエクサカーションは、5台のバスが用意されており、奇数番号は日本のガイドがつくという。我々の3号車のバスにはガイドの張さんが乗り動きだすと絶え間なくジョークを交えた説明が続く。途中のパナナ園で一休みして埔里に着く。

ここは、台湾でも有名な蝶の採集地として知られ、木生昆虫館がある。ここには台湾だけでなく世界各地の昆虫標本が並べられている。

次は日月潭、天然の湖水であったが、発電のため大きくして現在の湖になったという。台湾中部の観光地として有名である。湖の周りには、きれいな廟や寺がいくつもあるが、その中で西遊記で有名な三蔵法師を祭った玄奘寺と孔子廟で下車する。孔子廟は、いうまでもなく孔子を祭ったものだが、台湾では、どの町でも立派な孔子廟がある。ただし中国本土では文化大革命の頃、孔子の思想が批判されて多くが破壊されたそうである。バスは山間地に入り、ピンロウ樹の林を見ながら進み、南投県にある特有生物研究所に向かう。

14時45分同所到着。ここでは台湾特有の動植物の保護を目的として設立され、訪問者には展示やビデオ上映が用意されていた。「ピンロウ」は耶子の種類で、その実は食用ではないが、ガム代りに噛むもので長距離運転のドライバーなどに眠気覚ましとして愛用されていると聞く。これには習慣性があり、病みつきになるらしい。これは、「紅石灰」と一緒に噛むもので口から出すと血を吐いているようで、これを見た欧米人が「台湾には結核が多い」と誤解されたそうである。とにかく道路沿いには、どこを行ってもピンロウ売りの売店が続いており、買っている人は見かけない。昨日の獅潭郷でも同様であったが、台湾の中央山脈は標高もあり険しい坂道が続く。台湾が日本領であった頃は日米開戦の暗号名「ニイタカヤマノボレ」で有名な「玉山」や「雪山」などは、富士山よりはるかに高く3000メートルを超える峰が何十もあるという。とにかく山脈を横断する道路建設は至難の技で、かつて蒋介石総統は、退役軍人の労力を使って3本の横断道路建設を試みたという。16時バスは同じ道路を引き返して、台中に戻る。18時から市長招待のパーティーがあり、せっかくの機会でもあり、我々も出席することにする。朱会長に続いて市長が流暢な英語、日本語、そして中国語で挨拶する。立食パーティーが始まるが適当に切り上げてホテルに戻る。

11月20日（木） 高雄、台南へ（科学工芸博物館）

8時40分改良場のリュウさんが迎えに来る。彼は日本語が上手である。日本人5名、改良場3名の計8名で高速道路を南下する。台南の近くで昼食をとり13時、高雄着。

さすがに気温が30°位で暑い。市内に入り、科学工芸博物館を訪ねる。ここは開館したばかりで、日本でいうと科学博物館、札幌青少年科学館のように子供たちが遊ぶに好適である。入場料100元、入場者数などが電光掲示板に自動的にチェックされ、良く出来ている。農業、生物学、繊維関係などざっと見学する。

15時30分澄青湖に行く。広いきれいな公園で、歩いたり、車で湖水を一周したりする。湖水には有名な九曲橋がかかっており、あちこちで新婚さんが記念撮影をしていた。17時頃ここを出て再び高速道路で台南に向かう。

18時10分剣橋飯店でチェックイン。一泊日本円で約4000円ずいぶんきれいな新しいホテルである。19時頃食事に出かける。連れていかれたのは、焼シャブの店で食べ放題のバイキング、一人248元である。食材は豊富で肉、魚それらの加工品、野菜などなんでもある。2時間食べてすっかり満腹した。22時頃ホテルに戻り就寝。

11月21日（金） 台南から台中へ戻る

7時45分頃チェックアウトして近所の道教のお寺を見る。その後、鄭成功の砦の遺跡として有名「赤かん楼」へ行く。鄭成功は中国の元に滅ぼされた明の遺臣で、明の再興を願って来日したが、のち台湾に渡り、当時この台湾を占領したオランダの勢力を滅ぼして、現在の台湾の基礎を築いた人として有名である。彼の壮図は、早死のため果せなかったが、その物語は、近松又左衛門の書いた「国姓爺合戦」の主人公「和藤内」の生涯として、日本でも良く知られている。彼の活躍した1600年代は、日本では徳川幕府が鎖国政策を始めた頃であり、オランダとのみ貿易をしていた時代である。当時オランダはイスパニアと東洋での覇権を争っていた時代である。そのオランダ遺跡「ゼーランジャー城」に行く。今はブロックを積んだ城壁の跡に木の根が絡まっているだけだが、古戦場の雰囲気だけは何となく分かる。「つわものどもの夢の跡」である。車で移動すると砲台の跡地が公園になっているが、丁度工事中だったので、見物は諦める。

10時頃新築の台南市役所を横に見て、渋滞の市内を通り抜け昨日とは逆に一路台中に北上する。17時20分今晩はサヨナラパーティーの会場である蓮国ホテルに行く。20時中田先生とホテルの周辺を一回りして自分の部屋に帰る。

11月22日（土） 野蚕シンポジウム（終了後台北へ）

8時30分荷物を持ってチェックアウト、タクシーで会場に行く。9時、野蚕シンポジウム開会。合計で12題の発表が終わる。

13時50分頃改良場の車で台北へ向かう。台北のホテルの前はものすごく混雑していた。18時頃、皆で食事に出る。林氏のお父さんと、奥さんのご両親の3人が待っていてくれた。3年前、徐さん家族が札幌の雪祭り見物に来た時、中田先生が案内したそうで話はずきない。ここの料理は今回の台湾訪問で最高であり、せっかくの振る舞いだから、遠慮なく頂く。土曜日の晩ということもあって、店は家族連れで一杯である。こんなところからも台湾の経済力を感じる。林氏のお父さんは今年86才。医師としての現役は引退したがまだまだ元気である。食事のお礼を言って21時ホテルに戻る。荷物の片づけをしていたら就寝は深夜になった。

11月23日（日）

いよいよ今日で台湾ともお別れである。林氏には、ご両親までお世話になりお礼の申し上げようもない。6時30分頃ホテルの前の街路を歩く。この辺りは予備校が多く、若い人が沢山歩いているが、早朝の事として、昨晚の混雑が嘘みたいである。8時の出発に備えて皆さんそれぞれ、外食を済ませていた。

8時発リュウさんがワゴン車を運転する。先ず市内の中心、総統府の近辺から中正記念堂へ行き、その周辺を歩く。広場では国民党の候補者を支援する会が開かれている。選挙の結果野党の台湾独立派の勝利に終わったと日本に帰ってから分かった。

9時になると記念堂が開くが、建物の中を見ている時間がない。そこで松山空港など市内各所を回り、中田先生の注文で円山飯店を見ながら台北を去ることになる。このホテルは旧台湾神社の跡地を利用して建てられた東洋一といわれる豪華なホテルで中田先生も一度泊ったことがあるそうである。近くには有名な故宮博物院もあり世界最古の繭が展示してあるそうで、50年前の国共内戦の時、他の宝物と一緒に北京から70両余りの貨車であちこち非難した末に、ここに運ばれたもので、このホテルに泊れば、見物には好適だそう

研修報告

である。

10時25分中正空港に到着。終始お世話になった林氏に心からお礼を言って別れる。12時20分定刻より15～20分遅れてC1100便は離陸して16時10分羽田着。17時発の札幌便に乗りかえ、18時40分千歳着、JRに乘る。中田先生と別れバスに乗り、家に着いたのは20時頃だった。台湾とは比べようもないが、思ったより気温は低くなく、快適に1週間の旅を終えることが出来た。

後記

帰ってから台湾の各所に、礼状や写真を送り、また同行し機会があった先生方に写真を送る。それぞれ返礼などあり、台湾からも沢山の写真や、コピーの入った手紙をいただいた。このような出張の機会に、外国の旅を共にすると、ことのほか親しくなれるもので、楽しく過ごすことができた。このような交際を今後も時々持ちたいものである。

最後に中田先生をはじめ、学会の先生方、台湾でお世話になった方々に感謝して出張の記録を終えることにする。

台湾全図

地図上の□は訪問先など文中にてでくる地名

